

熊本県矢部町「通潤橋」物語

—— 住民運動散策Ⅱ ——

別府大学文学部人間関係学科

秋田 清

I

別府から、やまなみハイウェイを下り、一宮、高森、蘇陽町、清和村を抜けると矢部町に至る。町役場から歩いて5分、目の前に大きな石橋が現れる。

長さ75.6m、高さ20.2m、アーチのスパン27.9mの石橋が轟川にかかっている。幅6.3mのこの橋の上を長さ約127mの3本の通水管が通っている。通水管は約90cm四方長さ40～60cmの石に30cm四方の穴をあけ、これを溝を掘ってかみ合わせ、漆喰で固めて作られている。ここを流れる毎秒0.85立法メートルの水が100haの白糸台地を潤している。

私は、お年よりたちの案内ボランティアが行われていると聞いて、ここを訪ねた。役場に行くと、林務商工観光課のN係長が応待してくれた。電話や他の職員の方との打ち合わせや指示で、話はしばしば中断されるほど忙しそうであったが、楽しそうに話してくれた。

通潤橋は、今、改修工事をしており、当時の関係資料が見つかって、工事の技術的な事に関して、いろんなことが分かってきた。それをめぐって、たとえば、漆喰の作り方などについて、みんなでいろいろ議論している。また、1998年には児玉辰春という人が、『虹の花咲く通潤橋』という子供向けの本を出版している。



『石橋探訪』（熊本県上益城地域観光推進協議会）より

ボランティア活動については教育委員会の担当ということで、委員会を訪ねた。

ここでは、社会教育委員のK氏に説明していただいた。矢部町では、25年前から4年制の「老人大学」を開設しており、卒業生は既に500人を超えている。卒業生が出たが、卒業生たちはもっと勉強したいというので、大学院を作り、そこは卒業なしで、終生院生ということにしている。

「老人大学」は芸能、技能、文化の3コースがあり、通潤橋の案内ボランティアはこの文化コースで、郷土史を学んだ人たちが、せっかく学んだことを、役に立てたい、多くの人、とくに子供たちに伝えたいということで、自発的に始まったそう。説明は橋の成立にまつわる話や石橋の建設に関する技術的な話を軸にしているが、話し手はそれぞれにアレンジして、個人的な事柄や想いを語っているという。ここで、ボランティアの一人、I氏を紹介していただいて、話を聞く事にした。

II

朝9時に待ち合わせをしていたが、10分前に着くと、既にI氏は公民館のロビーのソファに座って、何か書き物を読んでいた。早速話を聞くことにした。以下は、I氏、N係長、菊岡保人/宮崎司郎「吹上台メガネ橋を築造した地域開発の先

駆者・布田保之助翁」(『農業土木学会誌』第51巻第10号、1983. 10.)及び、矢部町発行のリーフレット、パンフレットから要約したものである。

白糸台地は四方を深い谷で遮られ、水の便が悪く、灌漑用水どころか飲み水も不足するような、矢部郷でも一番貧しい村であった。矢部郷の惣庄屋、布田保之助は人々の窮状を救おうと、笹原川の上流から用水路を引き、轟川を渡し、水を引く事を思い立つ。

この地方は、9万年前と推定される阿蘇山の大噴火による溶結凝灰岩が豊富にあり、この加工しやすい岩石に恵まれていたため、石橋が多く造られており、「種山石工」と呼ばれる石工の集団が存在した。だが、当時の石橋建築の技術では、高さに限界があり、出来るだけ橋を低くし、しかも出来るだけ広い面積の土地を潤すために、吹き上げ式の通水路が採用された。吹き上げ式の用水路は、高い水圧に耐えなければならない。この高い水圧に耐えるには石の通水路以外にはなかった。こうして、アーチ型の石橋の上に石の用水路3本を渡すという通潤橋の形が出来あがった。

嘉永5年(1852)2月、詳細な設計図が出来あがり郡代上妻半右衛門の手を経て藩への許可と援助の申請が行われた。同年10月、藩は御吟味約野田半右衛門を派遣して調査させ、①取水量と関係各

村に対する用水配分計画、②工事費などの問題、③通潤橋の構造上の問題、④経済効果、などについて解答を求めた。保之助は綿密な資料と関係庄屋連署の請願書を添付した回答を提出し、藩の許可を得た。嘉永5年12月、総延長46kmの水路工事が着工された。

この工事のうちもっとも困難な通潤橋の建造にあたったのが種山石工である。天命年間の終わり、八代郡東陽町種山に藤原林七と名のる男が長崎から移住してきた。彼は長崎奉行所に勤めていたが、メガネ橋に強い関心を抱き、その設計、工法を外国人から学んだ。外国人と接触するという国禁を犯した彼は武士を捨て、長崎を離れ、種山に住みついた。

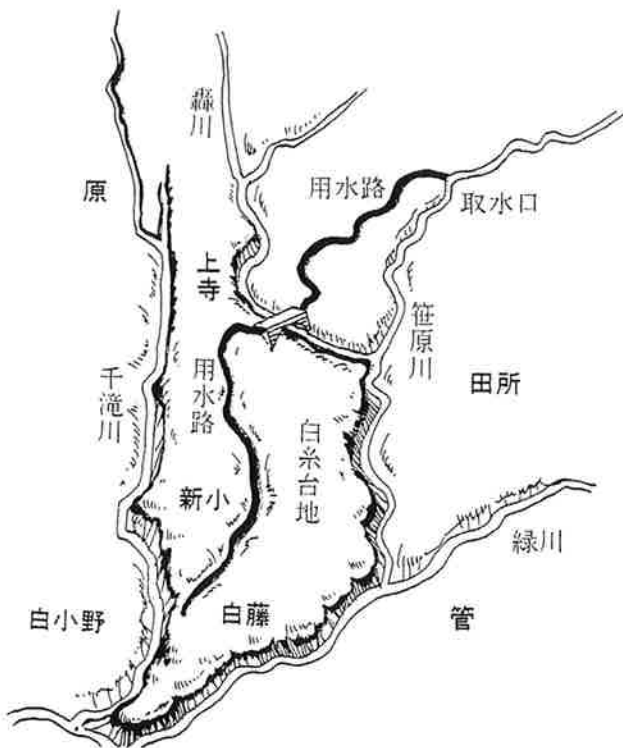
林七の子や孫たちは、円周率や曲がり尺の裏目を使って勾配の計算をする方法などを身につけ、石橋建造にその力を発揮した。林七の長男嘉八の長男卯助は霊台橋(砥用町、1847年)の建造にあたって棟梁を務め、通潤橋建造においては、嘉八の次男宇一が棟梁となり、三男丈八が中心になって建造にあたった。

丈八は、通潤橋建造の功により苗字帯刀を許され、橋本勘五郎を名乗った。その後、明治6年、大蔵省土木寮御雇として、二重橋、万世橋、日本橋、浅草橋、神田橋などの建造にあたった。

III

私は前に(「甲良町の公園づくり」<『地域社会研究』第3号>)、甲良町の公園づくりについてふれた。その際、公園づくりにおける思想が住民生活の他の部分を含めた全体の思想として定着できるかについて気にしながら、グランドワークトラストの事務局長T氏の話聞いた。この点に関してT氏は、「民主主義の再教育」という言葉を使っていた。T氏の「民主主義」という言葉に込めた思いは理解できたが、言葉としては違和感を感じた。

「民主主義」という、一人ひとりの個人にとって直接的には外的な政治システムによっては、人は自らを律してはいないだろうと思えた。最近流行りの言葉ではあるが、「物語」の方がぴったりくるような気がする。



『石橋探訪』(熊本県上益城地域観光推進協議会)より

人は古来さまざまな物語を作って生きてきた。神話、伝説、昔話など、宇宙や国の生誕に関する物語から、教訓話や果てはオヤジの自慢話まで、さまざまな物語を作って人は生きてきた。「人はモノガタリを生み出しながら生きる存在」(錦仁『浮遊する小野小町』笠間書院)、人は「神話をいきる」(河合隼雄『日本人の心』潮出版社)存在、「人間は誰でもアイデンティティを求める。自分が帰属するものを求める」(五木寛之『日本人の心I』講談社)存在であり、そうした民族や地域、個人のアイデンティティを確認する物語のなかで、自分が生きていることの意味と生き方を問いつづけながら生きる存在である。あるいは「人間は人間という病気にかかっている」(河合、前掲)ということかもしれない。

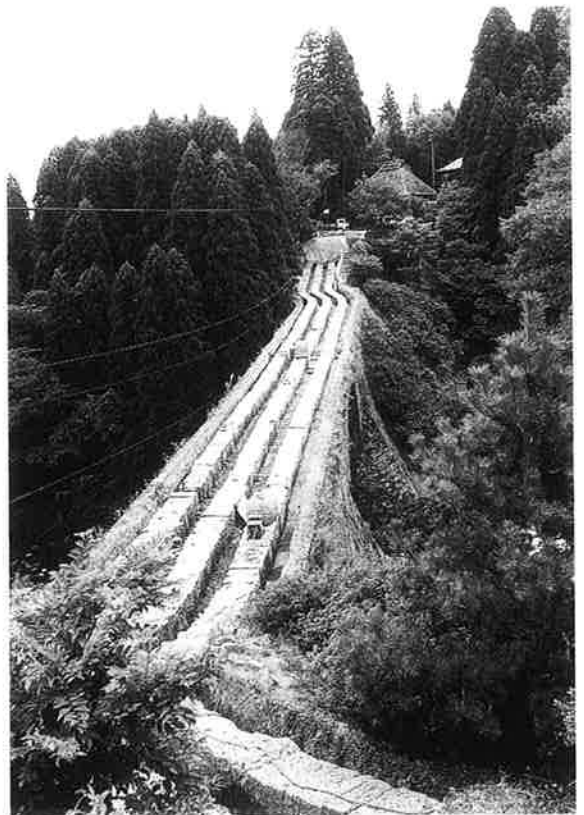
物語にはさまざまな位相がある。国家統合の原理から、民族が持っている意味体系、限りある命を超えようとする信仰、誇りを支える信念やなぐさめ、生活の指針としての教訓など。私が地域づくりのなかで問題にしたいのは、国家や地域の統合原理として絡めとられながら、たえずそれに抵抗し、紡がれなおしていく個人の物語である。

IV

今回の調査では、K氏のお世話で、案内ボランティアのI氏に会った。I氏は、調査の主旨を話すと、ぼつぼつと語り始めた。

「先週、東南アジアからの留学生が見学に来まして、案内をしましたけれど、若い人たちが、2世紀も前に出来た橋を真剣に見て話を聞いてくれるのです。昔の人たちが造りあげた大事なものを、なにかお役に立つのかなと思うくらいですけど、やっぱり、真剣に勉強をする。感動しました。今朝、手紙を書きました」。

「154年も前の事ですけれど、布田という人が、ちりぢりばらばらの村むらをまとめて、私は戦争に行きましたのでなんですが、1億総動員みたいな感じで、通潤橋は出来ているのですよね。みんなの気持ちをぴしっとまとめて、リスクの多い仕事、お金のかかる仕事をやっているのです。その心意気と言いますか、ヤッパリ人を統御していくものを布田さんという人は持っていた。そういう



事を感じますね。長い間説明をしていると、そういったことが解かるような気がして、なんかそういった事を訴えたくくなりますね」。

「布田保之助という人は、ここは76ヶ村あったのですが、それをひとつの集落も欠かさないように全部に公共事業を行っているのです。道を作ったり、恩恵に浴さないところはひとつもないように手をつけているのですよ。良く金があったなと思っていたのです。自習館のI先生が古文書を調べたところによると、年貢米を取り上げるほかに、13,000人~15,000人から、少しずつ取ってたくわえて、ほんの誘い水でしょうけど、準備している。そういったことがあったので、布田さんの言う事やったら、みんな加勢をせにゃという雰囲気があった。人の心をつかむ人の偉大さというのを感じます」。

——それはどうして出来たのでしょうか。

「茅立て風呂ってご存知ですか。汚れが溜まって、何日も何日も入るから、風呂に汚れが溜まって、茅を刺しても倒れないようになる。それぐらい水にも苦勞していた。そういった中で、村人も次第に去っていく、心がすさんでくる。そういった事を長い間見てきたから、一生かけても、これを解決しないといけないと布田さんは思っていたのでしょね。そういったことがあったから出来

たのでしょうか。用意周到とか、あらゆる人の知恵を絞って、文献などない時代ですから、豊後まで歩いて行って、(漆喰の)研究をしたり、手探りで、何回も実験したりしてできたのですね」。

「私たち最初は7人ではじめたのですが、子供たちに話していると、心から自分が感動して、涙が出るようなことを何度も経験しました。気持ちが伝わってくるのです。私は75歳ですけど、ほんとにありがたいことだと思います。内のじいちゃんも一緒に石を荷ったのだと思うと身近に感じるんですね。だから、郷土の遺跡というのは、身近さを感じるんですね」。

「五郎が滝というところに、石切場があって、ここから石を切って運んだと思われる所があって、ここからどぎゃんして運んだのだろうか、浮力を利用して水の中を運んだのだろうかとか、そういった事を想像たくましく考えていると。ほんとに楽しいんです」。

「漆喰にしても、10年前に改修工事があって、現在のものを使ったんです。そしたら10年しか持たなかった。今回、当時の記録にある漆喰を造ろうという事で進められていますが、赤土、川砂、貝灰、塩などのほかに若松葉とか卵などを使っている。若松葉って、新芽のことなのか、青い葉のこととか、卵は当時貴重なものだったはずで、そんなに大量に準備できたのだろうか、単に漆喰を入れるときにすべりを良くするために石に塗っただけではないかとか、素人が勝手にいろいろ議論したりもしています。それがとても楽しいんです」。

「この前、バングラディッシュの若い人たちが来て、役に立つかどうかわからないような話を、熱心に聞くのです。話は長くなりますが、私は志願して少年飛行隊に入ったんです。全員が特攻隊

に入ったわけではなかったのですが、19、20歳というのは子どももいない、恋人もいない。だからつぶすのには一番適していたんです。1,300人くらいいた隊員の内700人くらいは死んだんです。だから、その想いもあったのかもしれませんが。自分は生き残っている。なんかせにゃいかん。そういうことが、ボランティアをやっている事と関係があるかもしれません」。

I氏は、寝たきりの奥さんの世話を毎日しながら、老人大学に通い、ボランティア活動をしている。「週に3日、昼間はヘルパーさんが来てくれるので、その時間が私が自由になる時間です。家に帰ると女房が待ってて、喋り捲るんです」。「大変です」といいながら、とても楽しそうである。

ここは、介護のシステムなどはどうなっているのですか、という問いに、「ここは他所にくらべると早くから取り組んでいて、地域の介護は進んでいる方だと思います」とK氏。

—— 布田さんみたいなすごい人が現れたということは、そういう人を生み出す地域の住民の雰囲気とか土壌というものがあつたんだと思いますが、そういうものが、生きつづけていたと言えるのでしょうか？

「そうかもしれませんね」と、お二人とも「そうだ」といいたい気持ちと、「そんなに単純ではないだろう」という気持ちが縋い交ぜになったような返事をされた。

ここで、通潤橋建設にあたった、先達の地域共同の精神が今も脈々と流れている、と教訓化されたり、そうした言葉で教育されたりしたら、それは直ちに強制の論理に転化する。その地域の過去の人々の工夫や知恵、技術や労苦に対する感動が、感動として語り継がれていくとすれば、その共鳴が新しい地域を創っていくのかもしれない。